

桃 食害果を 迅速検出

山梨県のJAフルーツ山梨の後援で、数直販センターは、山梨大学が開発した「モモシンクイガ検査システム」の2019年稼働に向け、最終調整に入った。輸出の妨げとなっていた同害虫。被害果を素早く調べることで、輸出の促進が期待できる。特産品の販路拡大で地域農業の活性化に貢献するとして、早期実用化を目指す。

JAフルーツ山梨

台湾向けの桃輸出増に取り組んでいる山梨県。大きな販路として期待する台湾の検疫では、果実内に幼虫が存在しないことが求められる。モモシンクイガの幼虫

箱詰めまで機械化 台湾輸出へ弾み

は、ふ化後に果実内に侵入して食害する。果実に開ける穴は、0.2ミリと極めて小さく、発見が難しい。目視による全量検査

「モモシンクイガ検出アルゴリズム」と、果実を保持・回転させる検出装置を国などの支援で開発し、システムとして構築した。検査は、X線で果実を撮影し、コンピューターが被害の有無を数秒で判断する。検出装置には、X線を遮断する扉を設置し、人

同センターでは、検査システムを使い被害の検出精度や操作の確認、作業性などを実証し、実用化を目指す。JAの中澤昭組合長は「台湾は、桃の販路として非常に重要な消費地。装置の完成は、輸出先と産地を結ぶ懸け橋になる」と期待する。同大の小谷信司教授は「10年から開発を始め、紆余(うよ)曲折しながらも完成間近となった。機械化で、作業者の労力軽減と産地の信頼を守りたい」と話す。(山梨・フルーツ山梨)



検査装置を稼働させる山梨大学の学生(山梨県山梨市で)